滋賀文化財だより
NO. 163
1991. 9. 20
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

189. パジリク王墓 日ソ合同発掘調査参加記 （後編）

1．ゴルノアルタイ地方の岩壁画

アルタイの山々は、山に残る氷河が解け濁流が谷を削り山々を険しくしている。このアルタイ山脈の北方に広がるゴルノアルタイ地方にいくつかの岩壁画があるということで、ヘリコプターで見学にでかけた。ウコック高原から氷河を越えて、谷川に沿って高度を下げて降りたところがクチュルラ岩陰遺跡であった。

数年前発掘されたというこの岩陰から、多数の動物たちが描かれているのが発見された。動物は大きなツノを持ったシカや山羊、羊たちである。この壁画の年代は青銅器時代（紀元前３世紀ごろ）から中世にかけてのもので、つい半世紀ほど前までこの岩陰で2000年前と同じように羊を飼っていたという。歴史の流れがゆっくりとした地方である。

ウコック高原で、昨年に岩壁画が発見されており見学に出かけた。壁画の描かれた時代は、スキタイ初期（紀元前７～８世紀）のころと推定され、発見者は今回の発掘調査に参加しているデュマ君という学生で、昨年この周辺を歩いて踏査中に見つけたという。

壁画は約15mほどの高さのほぼ垂直に切り立った岩壁にラクダ、トナカイ、羊など数種類の動物が描かれている。鋭い金属器で岩を削り取って動物を表現している。岩肌が苔などの繁茂で風化している部分もあるが全体的によく残っている。この周辺の岩陰には、こうした岩壁画がまだ残っている可能性があるという。今後の発見が期待される。

クチュルラ岩陰遺跡

ウコックの岩壁画

山羊の壁画

ラクダの壁画

デニソワキャンプ

研究室（デニソワキャンプ）

旧石器時代の遺跡の発掘調査（デニソワ）

排土の選別作業（デニソワ）

2．デニソワキャンプ

デニソワは、ロシア連邦共和国のなかのノボシビリスク州とアルタイ自治州のちょうど境界にあり、周辺の谷には多数の洞窟遺跡や岩陰遺跡が分布している。夏のあいだこのキャンプ地を拠点として、周辺の旧石器時代の遺跡の発掘調査が実施される。我々が訪れたときにも数ヵ所の遺跡の発掘がおこなわれていた。

同キャンプ地は、ソ連科学アカデミー・シベリア支部が管理しており、学生たちの宿舎や集会所などの施設がととのっている。また、外国からの訪問客のために簡単なコテージが建てられていて、我々もこのコテージに5日間ほど宿泊し、次に紹介するように旧石器遺跡の発掘現場の見学にでかけた。

デニソワの気候は高原と比較して非常に穏やかである。気温は25度前後で湿度が低く、夜間も余り気温が下がらず快適である。山々には木々も多く、牛や羊が放牧されており、飼料のための穀物を作っているという昔ながらのアルタイ地方らしいところである。

デニソワ洞窟遺跡は、現在3ヵ所が発掘調査を継続しており、50人ぐらいの学生が1m四方のグリッドの区画内を2、3人が一組になって担当し、掘削した土はすべて近くの川に運び金網にあけて水洗し、石器やフレーク、チップなどが排土の中にないか確認していた。

堆積層の断面（デニソワ）

出土した石器類（デニソワ周辺）

3．デニソワ谷周辺の遺跡

デニソワからヘリで約１時間飛んで、シュトラシナヤ洞窟遺跡に見学に出かけた。洞窟の立地は谷に流れる川より50m以上高い岩山の中腹にあり、ヘリは着陸せずにホバーリングしながら我々を下に降ろした。洞窟で生活していたころは寒冷期で、氷河が身近にせまっていたことだろう。この洞窟からは川に沿って広がる森林が眼下に見渡せる。動物たちの動きが一望できる立地にめぐまれた洞窟である。

この国はどこの遺跡でもおなじであるが、夏期のあいだの発掘調査は、研究所の職員や学生が遺跡近くにテントを張り自給自足の生活をしながら続けているようで、さすが自然のなかでの野営生活に慣れている。

この洞窟遺跡の近くにガラボン岩陰遺跡がある。この遺跡には泉が湧いていて古代からの信仰の場所であったといわれる。現地のキャンプ地で昼食をとった。

この日の帰りにシベ遺跡という、パジリク文化期の墳墓を見学した。この地は1920年代にすでに発掘されていたが、積み石の多さには驚いた。10kgほどの石を無数に集めて主体部を覆っていたようで、盗掘などを防ぐためか、不意に下の石を取り除こうとすれば上の石が崩れてくるという仕掛になっている。それにしてもこの石の数は天文学的数字であろう。また、ほどよい大きさの石を捜すのも当時は大変だったろう。

シュトラシナヤ洞窟遺跡

キャンプ地での調理

食料貯蔵用のテント

ガラボン岩陰遺跡

キャンプ地の子供

シベ古墳群

4．洞窟遺跡

ラズボイニチャ洞窟遺跡は、デニソワから南に約20㎞ほど離れたところの標高が約600m程度の比較的低い山の山頂付近にある。我々はこの洞窟遺跡の見学に出かけることになった。途中1ヵ所岩陰遺跡を見学した。ここでも発掘調査は夏の間だけで、遺跡の近くにこの地方の伝統的な簡易住居を建てて宿泊できるようになっていた。数10本の木を螺旋形に地面に突き立て、上部を束ねまわりにシベリア杉などの樹皮で巻いて風雨をしのぐものである。

そして洞窟のある山に登った。この遺跡は5万年から1万5千年前の堆積物がある洞窟遺跡で、現在は絶滅している種など59種の動物の化石が発掘されている。この地域一帯は石灰質の山で、侵食してできた洞窟がこの他に多数あるようである。この洞窟は、入口から20mほどで縦穴があり、さらに下っていくと化石の堆積物で行き止まりになっていた。現在調査は中断しており、資金のめどがつけば再開するそうである。

この洞窟にどうしてこれだけの多種の動物の化石が残っているのかたずねたところ、人間や大型の動物が獲物として動物をこの洞窟に運んできたり、動物が迷い込んで穴の中に転落したとも考えられるという説明であった。

洞窟の外の気温が30度前後であり、中がほぼ0度Cとたいへんに涼しく天井に水分が結露しツララとなっていた。洞窟の底には最近迷い込んだとみられる野ウサギが1匹見つかった。何万年も続いた堆積は現在も進行しているのである。

遺跡の見学から帰って夕食を終えデニソワでのバーニャ（サウナ風呂）に入った。ここのバーニャは、ウコック高原の仮設のバーニャとはちがい、大きなログハウスを4つの部屋に仕切り、第1と第2の部屋は待合室と脱衣場、第3の部屋はお湯が用意してあって体を洗う所、そして第4の部屋がサウナ部屋。第4の部屋にはバーニャ専用の薪ストーブがおいてあり、上に石がのっている。温度が上がればこの石が焼ける。人が入ってときどきこの石に水をかける。そうすればこの部屋は水蒸気で満たされることになる。

このストーブはソ連の既成品であるらしく部屋の大きさに応じて用意されている。このバーニャは必ず川の近くに建てられ、熱くなった体を冷ますためにこの川に飛び込む。水温が10度以下にはさすが飛び込むことはできなかった。しかしこのバーニャの日が待ち遠しくなった。みんなに人気があって順番待ちなのである。

デニソワでの食事はとてもおいしかった。とくにスープはいろいろなメニューのものが出された。ロシアの香辛料にウークロップという草のような植物がある。

ラズボイニチャ洞窟遺跡付近の仮設住居

ラズボイニチャ洞窟遺跡の入口

キャンプ地での食事（ラズボイニチャ）

洞窟のなかにできたツララ

アルタイの牧畜民

サヤエンドウを食べる子どもたち

アルタイの家族

アルタイの人々の住まい

ちょうどスギナのような葉っぱで肉料理に必ずついてくる。独特の強い匂いと味、とくに羊の肉の臭い消しに用いられるようだ。一度食べれば忘れられない味だ。

ここデニソワでも果物はほとんど見かけなかった。やはりシベリアという土地なのでフルーツはムリなのであろうか。あっても貧弱なモモていど。余談であるが、スープなどにはジャガイモが必ずといっていいほど入っている。ロシアのおばさんがあんなに太ってしまうのはジャガイモと肉のせいだといわれている。

5．アルタイの人々

アルタイの山のふもとには牛の放牧がさかんである。散在する村は周囲を木の柵で囲んで牛や馬が入り込んでくるのを防いでいる。この村々を結び牧草地のあいだを縫って道路が走っている。舗装はされていないので、路はいたるところに大きな穴があいていて車の乗り心地はすこぶる悪い。

道路が谷筋の湿地を通れば最悪である。タイヤがめりこんで動かなくなる。遺跡の見学で車で出かけたさいもなんどか危なかった。しかし土地はいやというほどあるから迂回の道はすぐできる。山の道を走るには4WDの車が不可欠である。

この地には驚くほど日本人に似ている人がいる。放牧をして、また小規模な畑作をして生活している地元の人たちは愛想がいい。馬に乗ってときどき発掘現場にも見学にやってきた。言葉が通じなくても片手を上げればあちらもニコッと笑ってあいさつしてくれる。愛想のいい遠い隣人だ。

牧畜を営む人々や農家の人々はやはり相当貧しいようだ。散歩の途中で出会った子供達はおやつがないのか畑で採ってきたサヤエンドウをいっぱいかかえ、生のままかじっていた。

日本に帰る前の夕方、アルタイの山のふもとでバーベキューパーティが催された。子羊を一頭我々のために料理してくれた。アルタイの人々は食事をする前、またウオトカを飲む前かならず『おお、アルタイの神よ！』といった内容の感謝の言葉を捧げる。この晩餐会のメイン料理は、子羊のシシカバブー、血のソーセージ、骨付き肉であり、野菜サラダそしてウオトカが準備された。途中地元のアルタイ人3人が会に加わってきた。一人が地元の酒（馬乳酒）そしてチーズを持参してきた。

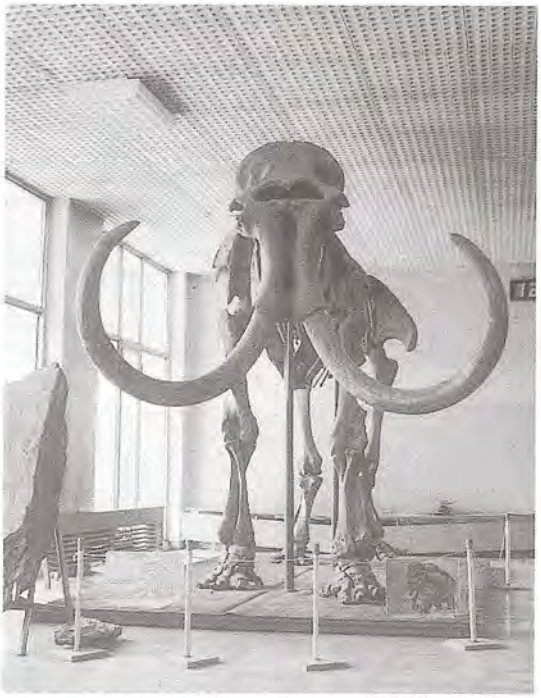
このチーズがなんともいえない味。そのアルタイ人はチーズの固まりを我々に勧めるとともに、酔っぱらってひとしきり演説をした。「このチーズは我々アルタイ人の祖先チンギスカン様のころからその製法が伝えられ・・・」といった内容らしい。このチーズをほおばりながら日の暮れるまでウオトカでカンパイを何度もおこなった。

北シベリア地域での出土品

商店前に並ぶ市民

国営商店の店内

ノボシビリスクの街並み



マンモスの化石（科学アカデミーシベリア支部）

6．再びノボシビリスクへ

デニソワキャンプからヘリでノボシビリスクに帰った。帰国前の2日間はこの学園都市で過ごすことになった。これまで発掘された資料を見せてもらうため、ソ連科学アカデミー・シベリア支部の研究所にでかけた。博物館建設の準備ということで展示室は閉じられていたので、残念ながら多くの資料を見ることができなかった。しかし、北シベリア地域での古墳の出土品は、中国、朝鮮半島そして日本などのものと内容が類似していて、今後相互の研究交流が進めば多くの新しい成果が期待できそうである。

帰国前夜、ソ連科学アカデミーの会員専用のサロンで催される映画に招待された。中には劇場や画廊、専用の食堂、体育館などがあり当然一般市民は入れない。これも特権階級の象徴のような施設である。

学園都市のなかの商店街にも出かけたが、やはり店内には商品の種類、量とも少ない。販売のシステムが煩雑で、ある物を買うのに長い列ができてしまう。また、商店街の広場に新鮮な野菜などを売る露店が立つとやはり市民が殺到する。まさに自由市場のミニ版である。

今日ソ連情勢が変動するなか、今回参加したパジリク王墓の発掘調査プロジェクトを転機として、北シベリア地域の歴史・文化の相互研究が進展することを期待する。　（中川　正人）